広報

おおず

2023
2
No.217

（特集）わが家に修学旅行生がやってきた
大洲市観光まちづくりシンポジウム

(特集)わが家に修学旅行生がやってきた

秋が深まる昨年の11月17日㈭、一台の大型バスが大川公民館前に停まりました。バスから降りてきたのは東京都にある宝仙(ほうせん)学園中学高等学校5年※G組の生徒30人。

G組のみなさんは修学旅行での農山漁村生活体験として大川地区と内子町で地域のみなさんと一緒に生活しながら過ごす一泊二日の「民泊」に訪れたのです。

※中学校から通算のため５年生は高校２年生にあたります。

対面式の後は、各班に分かれそれぞれの家へ向かいます。少し不安そうな表情を見せていた生徒達ですが、各家庭の温かさに触れすぐに笑顔を見せてくれるようになりました。野菜収穫や餅つきなどの新鮮な体験に大きな笑い声が大川地区に響きました。

対面式の様子

【農山漁村生活体験民泊事業】

八幡浜市の一般社団法人が企画し、南予９市町と協力しながら進めている自然や農林業の営み、暮らし、文化を地域の人たちとの交流を通して体験し、心豊かな田舎暮らしを実感してもらう教育向けプログラムを主体とした修学旅行生誘致事業。

収穫作業

餅つき体験

早朝の座禅体験

自治会長さんの話に大笑い

夕食もみんなで準備

お孫さんもいっしょに

民泊を終え

わずか二日間の交流でしたが、どの班もまるで親と子、孫のように笑顔があふれます。離村式では涙を流し別れを惜しむ生徒もいて、それを優しく見つめる受入れ家族の姿やバス出発後もお互いが見えなくなるまで手を振り続ける光景が印象的でした。

受入れ家族からの声

「修学旅行で民泊体験」これは面白そうと受入れを決めてから、その日が来るまでワクワクがとまらない日々を送っていました。みんなとの緊張の対面から徐々に会話を重ねていくうちに互いに溶け込み、あっという間に一泊二日が過ぎて行きました。後日生徒さんから「今回の修学旅行で、民泊が一番楽しかったとみんなで話しています！」と嬉しい報告がもらえたのは何よりでした。こちらの方こそ貴重な体験ができ、何と言っても楽しかった。そして若い人達との交流はとっても元気をもらえました。次もあるならまたやってみたいですね。多謝

神尾　佳道（よしみち）さん
菜保子（なおこ）さん

生徒からの声

生まれて初めての民泊で普通の宿やホテルとは違う「家族の一人」になることに当日まで本当に緊張していました。 そんな私の不安を察してくれたのか、お父さんお母さんは本当に親切で優しくて自分が勝手に抱いていた不安に申し訳なく感じました。

家業体験では山を登っての椎茸（しいたけ）狩り、野菜収穫、餅作り、夜には満点の星空など私たちの地元では決してできないような素晴らしく貴重な体験ばかりさせてもらいました。見ず知らずの私達のためにしっかりと準備していただき、とても暖かいおもてなしはお二人の人柄の良さで溢れていて、この修学旅行全体を通しても間違いなく一番楽しかったと言えるような二日間でした。

５年Ｇ組　鳥居　里桜（りお）さん

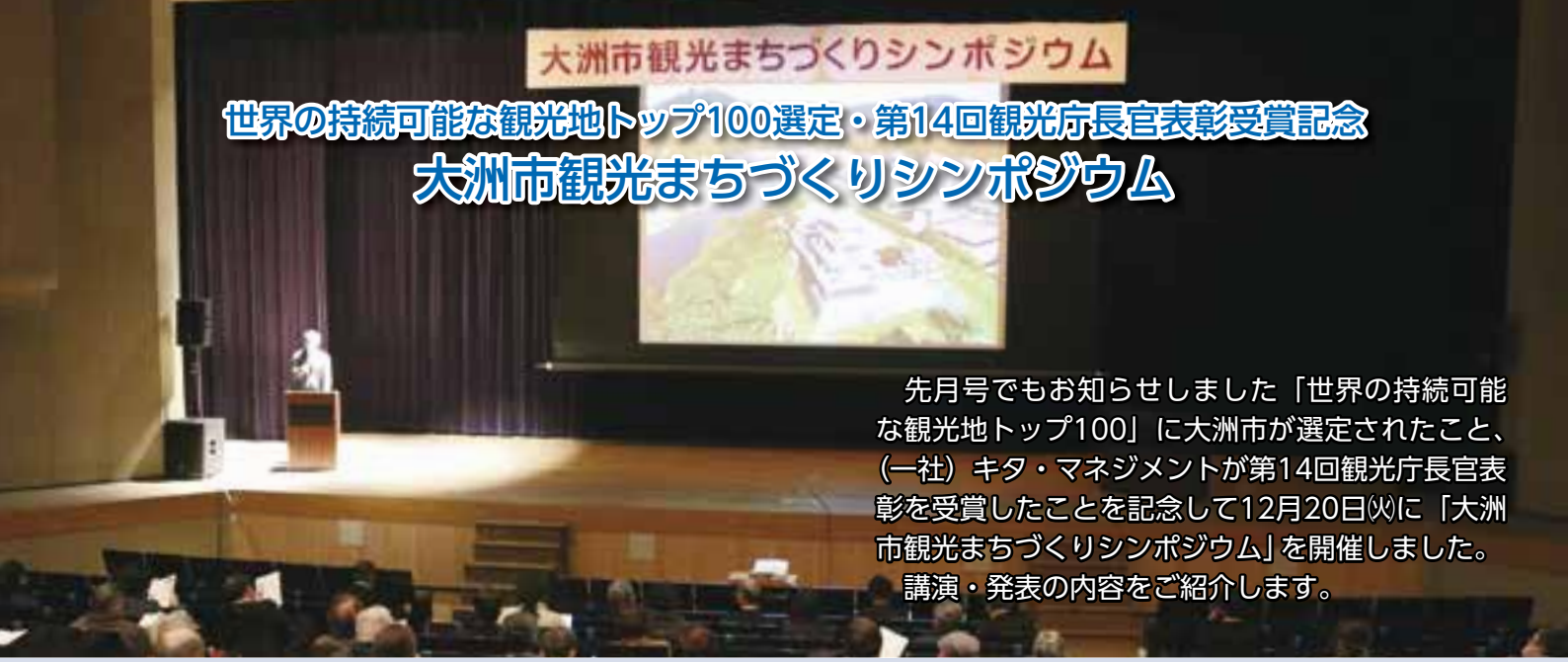
【事業ご協力のお願い】

農林水産課では、今後も体験民泊型の修学旅行生受入にご協力いただける地域、民家を募集しています。

詳しくは、問い合わせ先までご連絡ください。

【問い合わせ先】

農林水産課　農商工連携係
☎0893(24)1727



世界の持続可能な観光地トップ100選定・第14回観光庁長官表彰受賞記念

大洲市観光まちづくりシンポジウム

先月号でもお知らせしました「世界の持続可能な観光地トップ100」に大洲市が選定されたこと、(一社) キタ・マネジメントが第14回観光庁長官表彰を受賞したことを記念して12月20日㈫に「大洲市観光まちづくりシンポジウム」を開催しました。講演・発表の内容をご紹介します。

観光庁観光地域振興部長

中村　広樹さん

1969年 岐阜県岐阜市出身。
近畿運輸局企画観光部長、総合政策局交通政策課長、関東運輸局次長などを歴任。2022年10月から現職。

【講演】これからの観光政策

コロナ禍で落ち込んでしまった観光業のV字回復を目指し多くの施策を進めているが、その柱の一つに「高付加価値で持続可能な観光地域づくり」というものがあり、施設やサービスなど質の高いものを提供して、それに見合った額のお金を地域に落としてもらう。そして、そのお金を地域に生かし雇用や税収を増やすこと、また歴史的な資源を保全していくことで地域をより良くしていく。こういった持続可能な地域づくりを目指していきたいと考えている。

最近では単に「来て、帰る」だけではなく、その地にある自然や歴史、農業や漁業などの産業を体験できる形態の旅行が人気である。地域の人々も観光客と一緒に交流することで改めて地域の良さを知り、ふるさとを誇りに思うことができるような地域づくりや観光の仕組み作りが必要。大洲市ではキタ・マネジメントが中心的な役割を果たし、さまざまな工夫をしながら成果を上げている。これは先進的なモデルになるもので、今年度の観光庁長官表彰を贈らせてもらうとともに、観光庁としても全国に広がるように推進していきたい。

キタ・マネジメントの取り組み

私たちキタ・マネジメントは地域DMOという地域と共に観光地域づくりをおこなう法人で大きく分けて観光、物産、不動産の事業をおこなっている。設立以前は人口減少や少子高齢化、若者の市外流出によって空き家が急増し、建物がどんどん朽ち果てて「伊予の小京都」といわれた大洲の景観が崩壊してしまう危機に面していた。一方、観光客は観光施設を見て帰ることが多く、典型的な日帰り観光地としてお金が落ちない状況であった。これではだめだと、空き家を活用しながら残せる方法はないかと考え、他の宿泊業と価格帯が重複しない高付加価値な古民家ホテルという答えにたどりついた。

事業の流れとしては、所有者から賃借した空き家物件をキタ・マネジメントが宿泊施設として改修、そしてその物件をホテル運営業者へ貸して家賃をもらうというもので、家賃収入を得ながら地域の歴史的な建造物を維持することに成功している。

ホテルでの食事には大洲産の食材を多く使用し、地産地消に貢献してもらい、大洲市内の人を多く雇用してもらうことでホテルの売り上げをより多く地元に還元できる仕組みができあがった。また、旅行者の満足度を向上させるためにショップも多く誘致した。取り壊されるのを待つだけとなっていた古民家を甦らせ活用することで、この町が段々と活気を取り戻してきている。こういったことが評価され今回の観光庁長官表彰の受賞につながったと考えている。

(一社)キタ・マネジメント代表理事

髙岡　公三さん

1961年 大洲市生まれ。
㈱伊予銀行で県内の地方創生に関わり、2017年から大洲市の観光まちづくりを支援。2021年４月にキタ・マネジメント代表理事に就任。

NIPPONIA HOTEL 大洲 城下町の取り組み

東日本大震災を高校生の時に体験し、通っていた校舎が被害を受け、プレハブでの学校生活となってしまったことに「自分の思い出のある場所ってこんなに簡単に無くなってしまうんだ」とショックを受けた。また、大学時代のボランティアでは、残していきたいと願う人々の意に反して消滅していく限界集落などを目にしてきた。このような経験から地域にある先人の残した歴史や文化資源を活用しながら紡いでいこうとするバリューマネジメントに入社した。

ここ大洲での関わり合いで絶対に外すことができないものが「大洲城キャッスルステイ」で、この事業はホテル事業者だけでおこなえるものではなく、地域のさまざまな立場の人々がチームとなって宿泊者を迎える。大洲城には復元事業から始まって多くの人々の思いが詰まっていて、そして１泊２日の時間を通して宿泊する人にその思いや大洲という町の魅力を届けられる一番の表現方法がこのキャッスルステイだと気づいた。

この町で過ごしてきた時間はまだ２年と短いが、昔から住んでいると日常の中ではなかなか気づかない大洲の良さを「よそ者」の私が伝えていくという思いでこれからも地域のみなさんと手を取り合いながら働いていきたい。

NIPPONIA HOTEL 大洲 城下町 副支配人

大竹　由里子（ゆりこ）さん

1994年 福島県郡山市生まれ。
大学卒業後、バリューマネジメント㈱に入社し、2020年大洲に着任。
キャッスルステイをはじめホテル全体の企画・運営に携わる。

商舗・廊 村上邸　邸守

磯野　百会（ひゃくえ）さん

1966年 鹿児島県霧島市生まれ。
転勤で愛媛県を訪れたことを機に大洲市との縁が深まり、2020年から移住。
築170年の村上邸を預かりながら店舗・ギャラリーとして活用している。

商舗・廊 村上邸のビジョンと大洲のまちづくりへの期待

縁あって志保町通りにある村上邸を預かりながら運営していくことになった際、地元のNPO法人であるYATSUGIや多くの人にお世話になり開店することができた。運営チーム内で「突き抜けた感性をこの村上邸で伝えていく」ことを方針の一つに決めて以来、村上邸でさまざまな企画展示会やワークショップをおこなったり、来訪者に大洲の歴史や肱川の重要性などを伝える活動をしている。その中で茶道を学ぶ機会があり、千利休が確立した茶道こそが日本の究極の美であると考えるようなったが、その美を正に体現しているのが国の名勝にも指定された臥龍山荘（がりゅう）であり、地域にとって誇らしいことである。

村上家は精蝋（せいろう）で栄え、大洲銀行を立ち上げ大洲の産業経済を引っ張っていた。その後、吸収や合併を繰り返して今の伊予銀行となっていくこととなる。その伊予銀行がまた150年の時を経て大洲の地でキタ・マネジメントと一緒に盛り上げようとしてくれていることに不思議な縁を感じている。

今後も肱南地区の人々が築き上げてきた歴史を学び、後世に伝えていくことで大洲の価値を高め続けていくお手伝いをしていきたい。

サステナブルな観光まちづくり

７年前に大洲に来た時の印象は、山と自然に囲まれている地域なのに文化については非常に発達してきた地域であること。大学で「町と水」をテーマに研究することとなり、この城下町を調査したが、肱川を中心に明治、大正時代に非常にセンスが高く面白い建築物が多くできていることは珍しいと感じている。

「世界の持続可能な観光地トップ100」の国際的な選定基準には大きく言えば ①マネジメント（管理）②文化 ③環境 ④コミュニティ（社会）の４つのポイントがあって、それぞれに細かい基準がある。候補地がその基準にどう対応しているか確認していき、候補地は政策的・戦略的にきちんとしたビジョンを持ってないといけない。審査員の一人からは「古い建築の再生は、地域コミュニティの維持には不可欠。地域資源を再生する取り組みは住民、観光客のどちらにも恩恵をもたらしている。大洲が持続可能な観光地になったことは感動的だ」とのコメントがあった。

確かにマネジメントと文化については高い水準で達成できているが、環境とコミュニティについてはまだ少し弱いと考えている。スペインの町づくり事例の一つを紹介すると、子供を主体に考えて町内部の車の通行を制限することで子供たちの遊び場を創出し、高い評価を得ている町がある。こういったことも実現していくことができるよう頑張りたい。

㈠社)キタ・マネジメント建築文化研究所長

ディエゴ・フェルナンデス さん

1977年 スペインバレンシア生まれ。
法政大学大学院デザイン工学部建築学科で研究を経て、2019年から大洲へ移住。多様な視点から町の歴史や文化を再考している。